

〔論 説〕

孔子の倫理哲学論（3）
—道徳論を中心として—

浅 井 茂 紀

目 次

- I 序 論
- II 本 論
 - 第1節 孔子の孝
 - 第2節 孔子の志
 - 第3節 孔子の勇
 - 第4節 孔子の敬
 - 第5節 孔子の師
- III 結 論

I 序 論

論者は、「孔子の倫理哲学論（3）—道徳論を中心として—」と題して論説する。その目次は前記の如しである。そして、「孔子の倫理哲学論（3）」（以下、この論文では先のサブ・タイトルは時に省略する）の項目や内容の説明や記述はもとよりのこと、且つ、カントの『純粹理性批判』での「哲学する」（philosophieren）⁽¹⁾ ことや異文化で、宗教上のイエス・キリスト（Jesus Christ）の「良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。」（マタイ、12—35）⁽²⁾、とあるキリスト教の根本的原理である「愛」（agapê）、これらの認識や意識においても、この論文は、「孔子の倫理哲学論（3）」と題して考察することも可能であろう。

論者は、「孔子の倫理哲学論（1）—道徳論を中心として—」⁽³⁾、「孔子の倫理哲学論（2）—道徳論を中心として—」⁽⁴⁾、「孔子の道徳哲学論—四徳（仁、義、礼、知）論を中心として—」⁽⁵⁾、「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」⁽⁶⁾、などの論説でも、すでに儒教や儒学、孔子や孟子の哲学について多少なりともリサーチ（researches）を実践してきた。従って、今回もそれらのシリーズ（series）として記述する。

今回のこの論説は、前々回の「孔子の倫理哲学論（1）」や前回のその「孔子の倫理哲学論（2）」などとも関連する。最初に、

1. 孔子の孝について、孝とは何かを問題にする。孔子において、若者達は家庭内で父母に対して子供らしくしたり、世間に出ては目上におとなしく、父親の喪中の三年程は親の道、家風を改めたりしないのが親孝行などと考慮されているのである。
2. 孔子の志について、志とは何かを問題にする。孔子は、すでに、15歳頃から学問に志す、決心が有り、30歳で確立したとされる。さらに、発展して、自己の心の目的、彼の倫理哲学の根本的原理である仁に志す目的や信念を持っていたと言える。
3. 孔子の勇について、勇とは何かを問題にする。勇気や勇敢と仁とは車の両輪的とも言えよう。孟子は、孔子の言葉である「大勇」について引用している。また、『論語』や『孟子』には、「勇者」の熟語も存在すると思われる。なお、翻って、西洋哲学では、プラ

(1) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1956, A837, B865—A838, B866, S.752—753.

カント『純粹理性批判』（下）篠田英雄訳、岩波書店、昭和41年、128ページ、参照。

(2) 新改訳聖書刊行会『新約聖書, *The New Testament*』（英和対照）日本聖書刊行会、昭和52年、31ページ。

“The good man out of his good treasure brings forth what is good; and the evil man out of his evil treasure brings forth what is evil. (Matthew, 12—35).”

(3) 拙稿「孔子の倫理哲学論（1）—道徳論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第43巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2005（平成17）年12月31日発行、83—99ページ。

(4) 拙稿「孔子の倫理哲学論（2）—道徳論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第44巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2006（平成18）年12月31日発行、1—11ページ。

(5) 拙稿「孔子の道徳哲学論—四徳（仁、義、礼、知）論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第42巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2004（平成16）年12月31日発行、1—15ページ。

(6) 拙稿「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」（論説）『千葉商大紀要』第41巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2003（平成15）年12月31日発行、21—37ページ。

トンやアリストテレスも勇気や勇敢を重要視して、価値を置いているのである。

4. 孔子の敬について、敬とは何かを問題にする。鬼神に対しては、敬遠的な崇敬の念、人には、敬意の念も配慮したと思考されよう。後の性善説の孟子では、「恭敬」という熟語も存在するのである。

5. 孔子の師について、師とは何かを問題にする。マクロ的には世界的な人類の教師から学校の教師などまで考慮されようが、「温故知新」などは師や師匠、先生としての資質はもとよりのこと資格としても古今東西重要なファクター (factor) と言えよう。

かくして、中国の春秋時代、聖人・孔子 (Confucius, 552/551-479B.C.) は、何故これら孝、志、勇、敬、さらに、師などの倫理 (Ethics; Ethik; éthique) や道徳哲学 (moral philosophy) を主張したのかを問題にしてみたい。孔子の倫理的な哲学 (Ethical philosophy) は、人間としての基本的な理念 (Idee) ではなかろうかと、論者は考えるのである。次に、II 本論 第1節 孔子の孝から説明する。

II 本論

第1節 孔子の孝

『論語』における孔子の孝、すなわち、孔子の言う孝とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く、弟子入りては則ち孝、出ては則ち弟、謹みて信、汎 (ひろ) く衆を愛して仁に親しみ、行いて余力有れば、則ち以て文を學ぶ。(学而1), (傍点筆者)⁽⁷⁾。

孔子が言うには、世の若者達は、家庭にあっては父母に対して子供らしく振る舞い、世間に出ては目上に対しておとなしく。謹んで行動し言葉に信実があるようにする。また、分けへだてなく広く人を愛すべきだが、特に、仁徳の人に親しみ影響を受けるようにせよ。このように実行して、まだ余力や余暇があれば、文を学んで教養を高めるがよからう⁽⁸⁾。まずは実行が根本である。従って、孔子における孝 (filial) は、「弟子入りては則ち孝」ゆえ、若者達は家庭内では父母に対して子供らしく振る舞うという意義である。

□□子曰く、父在 (いま) せば其の志を觀、父没すれば其の行いを觀る。三年父の道を改めること無きは、孝と謂う可 (べ) し。(学而1), (傍点筆者)⁽⁹⁾。

孔子は、せめて父親の喪中の三年位は、父親の道、家風を改めるに忍びないのが、親孝行と言っている。さらに、魯の大夫や孔子の弟子 (樊遲) が孝について質問している。

□□孟懿子 (もういし) 孝を問う。子曰く、違 (たが) うこと無しと。樊遲御たり。子之に告げて曰く、孟孫孝を我に問う、我對 (こた) えて曰く、違 (たが) うこと無しと。樊遲曰く、

(7) 子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。(学而1), (傍点筆者)。

宋朱子 (朱熹) 集註『四書集註』香港太平書局、1964年、論語卷之一、学而第一、2—3ページ。宋朱子 (朱熹) 集註『四書集註』台湾中華書局、中華民國66年、論語卷一、学而第一、2—3ページ。

慧豐學會『漢文大系』(一)、新文豐出版公司、中華民國83年、論語集說、卷一、学而第一、7ページ。四部叢刊經部。『漢文大系』壹 (大學說、中庸說、論語集說、孟子定本)、富山房、明治43年、論語集說、卷一、学而第一、7ページ。

(8) 吉田賢抗『論語』(新釈漢文大系、第1卷) 明治書院、昭和35年、21ページ。

(9) 子曰、父在觀其志、父没觀其行。三年無改於父之道、可謂孝矣。(学而1), (傍点筆者)。

何の謂ぞやと。子曰く、生けるには之に事えるに禮を以てし、死せるには之を葬るに禮を以てし、之を祭るに禮を以てす。(為政2)⁽¹⁰⁾。

魯の大夫である孟懿子(孟孫)や樊遲に対して、親の生存中は禮を以て親につかえ、親の死後は禮を以て葬儀し、その法要なども禮を以てする。身分相応の禮節を以て行動することが孝である。違うことなしとは、禮に違うなということだと孔子は述べている。

□□孟武伯孝を問う。子曰く、父母は唯(ただ)其の疾(やまい)を之れ憂(うれ)う。(為政2)⁽¹¹⁾。孟懿子の子である孟武伯の孝の質問に対して、孔子は、父母はただ子供の病気が心配だから身体を大切に健康であることが親孝行であると言っている⁽¹²⁾。

次に、性善説の孟子における孝について、

□□孝子の至りは、親を尊ぶより大なるは莫(な)し。(万章上)⁽¹³⁾。

孝子、すなわち、父母に孝養を尽くす子の行為の極致は、両親を尊敬するより大きなものはない。従って、孟子の孝は、父母に孝養を尽くし、両親を尊敬する意義である。

ゆえに、孔子の孝では、「弟子入りては則ち孝」(学而1)とある如く、若者達は家庭内で父母に対して子供らしく振る舞うことである。さらに、「三年父の道を改めること無きは、孝と謂う可し。」(学而1)、父親の喪中の三年位は父親の家風を改めるに忍びないのが親孝行である。弟子達などには、両親の生前や死後も終始禮節を以て行動し、父母は子供の病気が心配だから身体を大事にして健康であることなどが孝の意義である。

次に、孟子における孝では、「孝子の至りは、親を尊ぶより大なるは莫し。」(万章上)とあるように、父母に孝養を尽くし、両親を尊敬するなどの意義であると、論者は考えるのである。次に、本論における第2節 孔子の志について説明する。

第2節 孔子の志

孔子の志とは何かを問題にしてみる。『論語』における孔子の志をみてみよう。

□□子曰く、吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従えども、矩(のり)を踰(こ)えず。(為政2)、(傍点筆者)⁽¹⁴⁾。

孔子が言う、私は15歳頃から先哲や賢人の教え、詩書礼楽などの学問に志した、云々と⁽¹⁵⁾。従って、孔子の志(bent)には、学問に志す、決心(decision)の意味がある。

□□子曰く、苟(まこと)に仁に志せば悪しきこと無し。(里仁4)、(傍点筆者)⁽¹⁶⁾。

孔子が言うには、誠に仁にさえ志せば悪の芽生える憂いは無い。この志は、心がその方

(10) 孟懿子問孝。子曰、無違。樊遲御。子告之曰、孟孫問孝於我。我對曰、無違。樊遲曰、何謂也。子曰、生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮。(為政2)。

(11) 孟武伯問孝。子曰、父母唯其疾之憂。(為政2)。

(12) 拙著『哲学の原理』[改訂版]、高文堂出版社、1987(昭和62)年7月7日、249ページ。

(13) 孝子之至、莫大乎尊親。尊親之至、莫大乎以天下養。(万章上)。

(14) 子曰、吾十有五而志於學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲、不踰矩。(為政2)、(傍点筆者)。

(15) 拙著『哲学要論』、高文堂出版社、平成14(2002)年4月1日発行、88ページ。

第8章 中国哲学 [孔子と孟子の哲学]、第1節 孔子の人生哲学について、参照。

(16) 子曰、苟志於仁矣、無惡也。(里仁4)。

(仁)に向かう。成し遂げようとする目標や目的を心に決める。めざす意味であろう。

□□子曰く、士、道に志して、悪衣悪食を恥じる者は、未だ與（とも）に議（はか）るに足らざるなり。（里仁4）⁽¹⁷⁾。

孔子が言う、士は、仁義道德の道に志し、めざして、学問や修養している身で、衣服や食事のみすばらしいのを恥辱とするようでは、まだ一緒に道を議論する資格はない。

□□子曰く、父在（いま）せば其の志を觀、父没すれば其の行いを觀る。三年父の道を改めること無きは、孝と謂う可し。（学而1），（傍点筆者）⁽¹⁸⁾。

孔子は、父の生存中は、その志（the bent）を觀察し気持ちを察して、父の没後は、その行跡を継ぐ。せめて父親の喪中の三年位は父親の道、家風を改めるに忍びないのが、親孝行と言っている。

□□子曰く、三軍も帥（すい）を奪う可きなり。匹夫も志を奪う可からざるなり。（子罕9），（傍点筆者）⁽¹⁹⁾。

孔子が言う、三軍程の大軍の総大将を奪うこともできる。しかし、たとえ一人の男でも、その断固たる志は、変更させたり、奪うことはできるものではない、と。従って、ここで志は、その人の目的、心念や信念でもあろう。

□□子曰く、其の志を降（くだ）さず、其の身を辱しめざるは、伯夷・叔齊か。云々。（微子18）⁽²⁰⁾。

孔子が言うには、常にその志をさげずに、また自分の身を清く保って、辱しめ汚されなかったのは、伯夷と叔齊の二人であろうか、と。この志（目的）を高く保った人物の具体例として、賢人である伯夷と叔齊の二人が存在したことも分かる。

□□子曰く、志士仁人は生を求めて以て仁を害すること無し。身を殺して以て仁を成すこと有り。（衛靈公15）⁽²¹⁾。『論語』においては、志や志す、という読み方だけでなく、「志士」（志のある人）、という熟語も存在する。次に、孟子の志について、

□□夫れ志は、氣の帥なり。氣は體の充なり。夫れ志至り、氣次ぐ。（公孫丑上）⁽²²⁾。

なお、孟子には、志士や心志、先生之志という言葉も存在する。

ゆえに、孔子の志では、「吾十有五にして學に志す。」（為政2）とある如く、学問に志す、決心の意味がある。さらに、「苟に仁に志せば悪しきこと無し。」（里仁4）や「匹夫も志を奪う可からざるなり。」（子罕9）などとあるように、自己の心の目的、仁をめざすことや信念の意義などがある。次に、孟子の志では、「夫れ志は、氣の帥なり。氣は體の充なり。夫れ志至り、氣次ぐ。」（公孫丑上）とあるように、心のある方向に発動したものの意味があり、人の気をひきいていくものなどと、論者は思考するのである。

(17) 子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。（里仁4）。

(18) 注(9)参照。子曰、父在觀其志、父没觀其行。三年無改於父之道、可謂孝矣。（学而1），（傍点筆者）。

(19) 子曰、三軍可奪帥也。匹夫不可奪志也。（子罕9）。

(20) 子曰、不降其志、不辱其身、伯夷・叔齊與。云々。（微子18）。

(21) 子曰、志士仁人、無求生以害仁。有殺身以成仁。（衛靈公15）。

(22) 夫志、氣之帥也。氣、體之充也。夫志至焉、氣次焉。（公孫丑上）。

第3節 孔子の勇

孔子の勇とは何かを問題にしてみる。『論語』における孔子の勇をみてみよう。

□□子曰く、其の鬼に非ずして之を祭るは、諂（へつら）うなり。義を見て爲さざるは、勇無きなり。（為政2），（傍点筆者）⁽²³⁾。

孔子が言う、祖先の霊以外を祭るのは、何か求める心がある諂いである。人間としてなさねばならない正しいこと、正義を見聞して、なそうとしないのは、真の勇気がないものだ。従って、この勇（courage）は、勇気や勇敢の意味である。なお、西洋哲学では、プラトンやアリストテレスなども勇気（andreia）や勇敢などに価値を置いている⁽²⁴⁾。

□□子曰く、由や勇を好むこと我に過ぎたり。材を取る所無しと。（公冶長5）⁽²⁵⁾。

孔子が言う、「由（子路）の勇気を好むことは私以上である。もし海外へ出るとすれば、私のお供をしてくれると勇み立っているが、実際は筏（イカダ）を組む材料さえも取得できないよ。」と⁽²⁶⁾。いささか寂しい言い方である。この勇は勇気の意味である。

□□子曰く、徳有る者は、必ず言有り。言有る者は、必ずしも徳有らず。仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず。（憲問14）⁽²⁷⁾。

孔子が言う、道徳者は必ず善言がある。しかし、言ある者は必ずしも徳が有るとはいえない。仁者は必ず勇気がある。しかし、反面、勇者は必ずしも仁が有るとはいえない。若気の至りで、蛮勇をふるい人道に背いた勇もあるからであろう。この勇も勇気の意味だが、この節に「勇者」の熟語も見当たる。

□□勇を好めども學を好まざれば、其の蔽（へい）や亂（らん）なり。（陽貨17）⁽²⁸⁾。孔子は、勇気を好んでも學問を好まないと、小勇の乱暴狼藉の弊害になるとした。

次に、孟子の勇について、孟子は、孔子の「大勇」を挙げて説明している。

□□昔者曾子、子襄（しじょう）に謂いて曰く、子、勇を好むか。吾嘗（かつ）て大勇を夫子に聞けり。自ら反して縮（なお）からずんば、褐寛博（かつかんぱく）と雖も、吾慄（おそ）れざらんや。自ら反して縮ければ、千萬人と雖も、吾往（ゆ）かん、と。（公孫丑上），（傍点筆者）⁽²⁹⁾。昔、曾子は、彼の弟子・子襄（しじょう）に対して次のように言っている。「子襄は、勇を好むか。私はかつて大勇について孔子先生からお聞きした。それは、自分で反省してみて、正しくない場合には、たとえ相手が褐寛博のような賤しい者で

(23) 子曰、非其鬼而祭之、諂也。見義不爲、無勇也。（為政2），（傍点筆者）。

(24) 注(15)参照。拙著、前掲書（『哲学要論』）、41—46ページ。第4節 プラトン、第5節 アリストテレス、参照。

(25) 子曰、由也好勇過我。無所取材。（公冶長5）。

(26) 注(8)参照。吉田賢抗、前掲書、105—106ページ。

(27) 子曰、有徳者、必有言。有言者、不必有徳。仁者必有勇。勇者不必有仁。（憲問14）。なお、「勇者」の熟語は、憲問14には、2節に記載がある。その他、「子曰、知者不惑。仁者不憂。勇者不懼。」（子罕9）とある如く、孔子には、「勇者」の熟語があり、孟子には、「勇士」の熟語が存在する。

(28) 好勇不好學、其蔽也亂。好剛不好學、其蔽也狂。（陽貨17）。

(29) 昔者曾子謂子襄曰、子好勇乎。吾嘗聞大勇於夫子矣。自反而不縮、雖褐寛博、吾不慄焉。自反而縮、雖千萬人、吾往矣。（公孫丑上）。

言わば、孟子の修養論において、孟子は、不動心を獲得する道として北宮黶の勇を養う方法と孟施舍の勇を養う方法の二つを説明している。北宮黶の勇は、子夏の勇に似ていて、孟施舍の勇は、曾子の勇に似ているとして、孟子が曾子の勇を語る中にこの孔子の「大勇」の事柄が引用されているのである。

も、その賤者に、自分はおそれずにはいられようか、おそれずにはいられない。反対に、自分で反省してみて、正しい場合には、たとえ相手が千万人の大勢であっても、吾はおそれずに、前進してゆくであろう。」と。この節は、孟子が、曾子の勇を語る中に、孔子の「大勇」の事柄が引用されている。また、孟子には、「勇士」の熟語もある⁽³⁰⁾。

ゆえに、孔子の勇では、「義を見て爲さざるは、勇無きなり。」(為政2)などとあるように、勇気や勇敢の意味である。さらに、「仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず。」(憲問14)とあり、孔子の「勇者」の熟語も存在する。次に、孟子における勇では、孔子の「大勇」について、「自ら反して縮からずんば、褐寬博と雖も、吾懼れざらんや。自ら反して縮ければ、千萬人と雖も、吾往かん、と。」(公孫丑上)などと説明している。さらに、孟子の「勇士」の熟語なども存在すると、論者は考えるのである。

第4節 孔子の敬

孔子の敬とは何かを問題にしてみる。『論語』における孔子の敬をみてみよう。

□□子曰く、千乗の國を道めるに、事を敬して信、用を節して人を愛し、民を使うに時を以てす。(学而1)、(傍点筆者)⁽³¹⁾。

孔子が言う、大国を治めるには、政事を慎重に敬虔で以て行い、人民の信頼を得る。国家の費用は節約もするが使うべきものには金をつかって、人民を愛し、人民を使う場合には、農耕などの時期を配慮すべきである⁽³²⁾。

従って、この敬 (reverent) は、政事を安易にしないで自己を戒め慎重にする、敬虔の意義である。

□□子曰く、父母に事えては幾諫 (きかん) す。志の従はざるを見ては、又敬して違わず、勞して怨みず。(里仁4)⁽³³⁾。

孔子が言う、父母につかえて、両親の過失に対して角立たないように諫める。子供の諫めが聞き入れない場合は、父母に敬意を失わず、子供は苦勞しても怨みを持ってはならない。この敬は、父母への敬意の意味である。

□□樊遲知を問う。子曰く、民の義を務め、鬼神を敬して之を遠ざく。知と謂う可しと。(雍也6)、(傍点筆者)⁽³⁴⁾。

樊遲が知について質問した。孔子が言う、人の義務を果たし、鬼神、すなわち、人の靈や天地の神々を崇敬するが、それらを敬遠する。これを知ということが出来る、と。

従って、この敬自体は、鬼神なので神靈への崇敬の意味であるが、しかし、敬遠する。

□□子路君子を問う。子曰く、己を脩めて以て敬すと。(憲問14)⁽³⁵⁾。

子路が君子について質問した。孔子は、「自己を修養して、自己をつつしむ人を君子という」と答えているのである。この敬は、自己をつつしむ意味である。

(30) 志士不忘在溝壑。勇士不忘喪其元。(滕 [とう] 文公下)。

(31) 子曰、道千乗之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。(学而1)、(傍点筆者)。

(32) 注(8)参照。吉田賢抗、前掲書、19ページ。

(33) 子曰、事父母幾諫。見志不從、又敬不違、勞而不怨。(里仁4)。

(34) 樊遲問知。子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣。(雍也6)。

(35) 子路問君子。子曰、脩己以敬。(憲問14)。

次に、孟子の敬について、

□□故に曰く、難きを君に責める、之を恭と謂う。善を陳（の）べ邪を閉じる、之を敬と謂う。吾が君能わずと、之を賊と謂う、と。（離婁上）⁽³⁶⁾。

善の道を述べひらいて、君の邪心を閉じ込めてしまおうと努めること、これを君への敬という。この敬は、君への尊敬の意味である。

なお、孟子には、「恭敬」、或いは、「恭敬之心」などの熟語もある。

□□恭敬之心は、人皆之有り。（中略）、恭敬之心は、禮なり。（告子上）⁽³⁷⁾。

ゆえに、孔子の敬では、「事を敬して信、用を節して人を愛し、民を使うに時を以てす。」（学而1）とあるように、自己を戒め慎重にする、敬虔の意義である。さらに、「又敬して違わず、勞して怨みず。」（里仁4）や「民の義を務め、鬼神を敬して之を遠ざく。」（雍也6）などにより、父母への敬意や神霊への敬遠的な崇敬、自己をつつしむの意味もある。次に、孟子の敬では、「善を陳べ邪を閉じる、之を敬と謂う。」（離婁上）などとあるように、君への尊敬の意義である。さらに、「恭敬」や「恭敬之心」などの熟語も存在すると、論者は考えるのである。

第5節 孔子の師

孔子の師とは何かを問題にしてみる。『論語』における孔子の師をみてみよう。

□□子曰く、故きを温めて新しきを知れば、以て師爲（た）るべし。（為政2）、（傍点筆者）⁽³⁸⁾。

孔子が言う、「温故知新」、つまり、先哲や先人の過去の学説や事柄などを繰り返し研究して、他方では、現実的な新しい独創的な知識、発明や発見ができれば、人の師となる資格が有る。この師（teacher）⁽³⁹⁾は、人の師という意味である。もっとも、師といっても、世界的な人類の教師⁽⁴⁰⁾から学校の教師、大学教授（Professor）などまで内包されよう。

□□子曰く、三人行（ゆ）けば、必ず我が師有り。其の善なる者を擇（えら）びて之に従い、其の不善なる者にして之を改める。（述而7）⁽⁴¹⁾。

孔子が言う、三人が同じ道を行けば、必ずその中に自分の師とすべきものがある。自分のほかの二人の中の善なる者を選択してこれに従い自分の善を進め、その不善なる者に鑑みて自分の不善を改善する。かくすれば、多分、そこに自分の師は得られよう。

(36) 故曰、責難於君、謂之恭。陳善閉邪、謂之敬。吾君不能、謂之賊。（離婁上）。

(37) 惻隱之心、人皆有之。羞惡之心、人皆有之。恭敬之心、人皆有之。是非之心、人皆有之。惻隱之心、仁也。羞惡之心、義也。恭敬之心、禮也。是非之心、智也。（告子上）、（傍点筆者）。

(38) 子曰、温故而知新、可以爲師矣。（為政2）、（傍点筆者）。

(39) James Legge, *THE CHINESE CLASSICS, CONFUCIAN ANALECTS, THE GREAT LEARNING, THE DOCTRINE OF THE MEAN, THE WORKS OF MENCIUS*, Southern Materials Center, Inc., Taipei, 1985, p.140. レッグは、この書（*THE CHINESE CLASSICS*）で、『論語』（CONFUCIAN ANALECTS）における孝は、filial、と訳している。さらに、志は、bent、勇は、courage、敬は、reverent、師は、teacher、などと訳している。

(40) 拙著『教育哲学要論』、高文堂出版社、平成14（2002）年4月1日発行、26—29ページ。第9節 教師論—人類の教師・ソクラテスの教育哲学—、第10節 生涯教育—人類の教師・孔子の人格発達過程—、参照。

(41) 子曰、三人行、必有我師焉。擇其善者而從之、其不善者而改之。（述而7）。

この師は、師匠的な自分の師の意味であろう。

□□子曰く、仁に當りては、師にも譲らず。(衛霊公15)⁽⁴²⁾。

仁を実行するに当たっては、師、すなわち、先生と雖も遠慮せず譲らない。この師は、先生の意味である。

□□子、魯の大師(たいし)に樂を語りて曰く、樂は其れ知るべきなり。云々。(八佾 [いつ] 3)⁽⁴³⁾。

孔子が、魯国の大師に音楽を語って言う、「音楽はその型さえ飲み込めば、知ることが可能である」などと述べている。この大師とは、魯国の音楽の長官である。

孔子は「大師」の熟語も使っている。大師は、役人の長官であり、リーダーでもある。

なお、『論語』には、「士師」の熟語もある⁽⁴⁴⁾。次に、孟子における師について、

□□書に曰く、天、下民を降(くだ)し、之が君を作り、之が師を作る。(梁惠王下)⁽⁴⁵⁾。

孟子は、『書経』(泰誓篇の武王の言葉)を引用し、天が、人民を生み降ろし、天が君を作り、天が人の師を作ったと記述している。この師は、人の師の意味である。

□□人倫上(かみ)に明らかにして、小民下(しも)に親しむ。王者起る有らば、必ず來りて法を取らん。是れ王者の師たるなり。(滕 [とう] 文公上)、(傍点筆者)⁽⁴⁶⁾。

上にある者が、人倫、人道を明らかにすれば、下の人民は皆それに感化されて、お互いに親しむ。そうであれば、ひとたび王者が起こった場合、必ず来てその国(滕国)を模範とする。これは王者の師となるものである。従って、孟子では、王者の師がある。

□□孟子曰く、聖人は百世の師なり。伯夷・柳下惠是なり。(尽心下)、(傍点筆者)⁽⁴⁷⁾。

孟子が言う、「聖人は百世の末までも、人の師となるものである。伯夷・柳下惠がこの例である」と。また、孟子には、六師(六軍)などという熟語もある⁽⁴⁸⁾。

ゆえに、孔子の師では、「故きを温めて新しきを知れば、以て師爲るべし。」(為政2)とあり、人の師や教師、教授(Professor)の意義である。さらに、「三人行けば、必ず我が師有り。」(述而7)などにより、師匠的な自分の師、先生の意味がある。又、「大師」の熟語もある。

次に、孟子の師では、「聖人は百世の師なり。伯夷・柳下惠是なり。」(尽心下)とあり、人の師や王者の師などの意義が存在すると、論者は思考するのである。

(42) 子曰、當仁、不讓於師。(衛霊公15)。

(43) 子語魯大師樂曰、樂其可知也。始作翕如也。從之純如也。(八佾 [いつ] 3)。

(44) 柳下惠爲士師、三黜。(微子18)。並びに、孟氏使陽膚爲士師。(子張19)。

なお、士師とは、獄官の長を意味する。裁判官でもあったといわれる。

(45) 書曰、天降下民、作之君、作之師、惟曰、其助上帝。寵之四方。(梁惠王下)。

(46) 人倫明於上、小民親於下。有王者起、必來取法。是爲王者師也。(滕 [とう] 文公上)、(傍点筆者)。

(47) 孟子曰、聖人百世之師也。伯夷・柳下惠是也。(尽心下)、(傍点筆者)。

この聖人の概念に関しては、

拙稿「孟子の人物哲学論—孔子と孟子の哲学を比較して—」(論説)『千葉商大紀要』第36巻第1号、千葉商科大学国府台学会、1998(平成10)年6月30日発行、第5節、聖人の概念、16ページ。

(48) 三不朝、則六師移之。(告子下)。六師とは、天子の「六軍」と同じ意味である。

Ⅲ 結 論 [孔子の倫理哲学論 (3) —道徳論を中心として—]

論者のこの論説、「孔子の倫理哲学論 (3) —道徳論を中心として—」の結論としては、次のようになろう。帰納法によれば、まず、第1節から第5節までの各節について、

[1] 孔子の孝では、「弟子入りては則ち孝」(学而1)とある如く、若者達は家庭内で父母に対して子供らしくすることである。さらに、「三年父の道を改めること無きは、孝と謂う可し。」(学而1)、父親の喪中の三年位は親の家風を改めるに忍びないのが親孝行である。弟子達などには、両親の生前や死後も終始礼節を以て行動し、父母は子供の病気が心配だから身体を大事にして健康であることなどが孝の意義である。

次に、孟子における孝では、「孝子の至りは、親を尊ぶより大なるは莫し。」(万章上)とあるように、父母に孝養を尽くし、両親を尊敬するなどの意義であると、論者は思考するのである。

[2] 孔子の志では、「吾十有五にして學に志す。」(為政2)とある如く、学問に志す、決心の意味がある。さらに、「苟に仁に志せば悪しきこと無し。」(里仁4)や「匹夫も志を奪う可からざるなり。」(子罕9)などとあるように、自己の心の目的、仁の哲学をめざすことや信念の意義などがある。次に、孟子の志では、「夫れ志は、氣の帥なり。氣は體の充なり。夫れ志至り、氣次ぐ。」(公孫丑上)とある如く、心のある方向に発動したものの意味があり、人の気をひきいていくものなどと、論者は思考するのである。

[3] 孔子の勇では、「義を見て爲さざるは、勇無きなり。」(為政2)などとあるように、勇気や勇敢の意味である。さらに、「仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず。」(憲問14)とあり、孔子の「勇者」の熟語も存在する。次に、孟子における勇では、聖人・孔子の「大勇」についても引用して、「自ら反して縮からずんば、褐寛博と雖も、吾懼れざらんや。自ら反して縮ければ、千萬人と雖も、吾往かん、と。」(公孫丑上)などと説明している。さらに、孟子の「勇士」の熟語も存在すると言えるのである。

[4] 孔子の敬では、「事を敬して信、用を節して人を愛し、民を使うに時を以てす。」(学而1)とあるように、自己を戒め慎重にする、敬虔の意義である。さらに、「又敬して違わず、勞して怨みず。」(里仁4)や「民の義を務め、鬼神を敬して之を遠ざく。」(雍也6)などにより、父母への敬意や神靈への敬遠的な崇敬、自己をつつしむの意味もある。次に、孟子の敬では、「善を陳べ邪を閉じる、之を敬と謂う。」(離婁上)などとある如く、君への尊敬の意義である。さらに、「恭敬」や「恭敬之心」などの熟語もあると、論者は考えるのである。

[5] 孔子の師では、「故きを温めて新しきを知れば、以て師爲るべし。」(為政2)とある如く、人の師や教師 (teacher)、また、教授 (Professor) の意義である。さらに、「三人行けば、必ず我が師有り。」(述而7)などにより、師匠的な自分の師、先生の意味がある。また、「大師」の熟語もある。

次に、堯聖・孟子における師では、「聖人は百世の師なり。伯夷・柳下惠是なり。」(尽心下)などとあり、聖人は百世の師である。つまり、人の師や王者の師などの意義が存在すると、論者は思考するのである。

ところで、なぜ孔子は、これら孝、志、勇、敬、さらに、師などの倫理、道徳哲学を主張したのかが問題であろう。先ず、それは古代中国、周の春秋時代の状況とも関連して、

聖人・孔子の偉大で規範的な人格などに基づくと言える。特に、春秋時代は、迫り来る動乱の戦国時代を控え周の天子が没落していく過程であり、孔子は、周代の王族であり文武で活躍し業績を修めた周公旦を理想的な人物として、

□□子曰く、甚だしいかな、吾が衰（おとろ）えたるや。久しいかな、吾復（また）夢に周公を見ず。（述而7）⁽⁴⁹⁾、

と嘆いた如く、孔子は、政策的に善き国家建設のビジョン（Vision）を持ち、その政治の実現を願望していたゆえでもあろう。そのことは、以前の論者の論説における孔子の仁、義、礼、知、また、信や愛の哲学はもとより⁽⁵⁰⁾、前々回の論説における学、道、徳、善や天などの孔子の倫理、哲学⁽⁵¹⁾、前回の論説における自、己、教、論や朋友などの孔子の倫理、哲学⁽⁵²⁾、そして、今回の論者の論説におけるこれら孝、志、勇、敬、さらに、師などの孔子の倫理、道徳哲学は、人間としての基本的な理念（Idee）であり、眼目であったと、論者は思考するのである。

さらに、論者のこの論文、「孔子の倫理哲学論（3）」では、ロゴス（logos）的に体系化（systematization）して、その中身を「哲学する」（philosophieren）⁽⁵³⁾ことを試みた。

よって、このような内容により、論者の「孔子の倫理哲学論（3）—道徳論を中心として—」[Confucius' Philosophical Theory of Ethics (3)—Attaching Importance to His Theory of Morality—]の論説は、過去、現在、未来の三世に渡り、多少なりとも意義と価値があろうかと、論者は考えるのである。

…………… {2007（平成19）年9月14日（金曜日）、原稿提出} ……………

(49) 子曰、甚矣、吾衰也。久矣、吾不復夢見周公。（述而7）。

(50) 注(5)参照。拙稿、前掲論文 [[孔子の道徳哲学論]]、1—15ページ。

(51) 注(3)参照。拙稿、前掲論文 [[孔子の倫理哲学論（1）]]、83—99ページ。

(52) 注(4)参照。拙稿、前掲論文 [[孔子の倫理哲学論（2）]]、1—11ページ。

(53) 注(1)参照。Immanuel Kant, *op.cit.*, A837, B865—A838, B866, S.752—753.

[抄 録]

孔子の倫理哲学論 (3)
—道徳論を中心として—

浅井茂紀

この論説は、目次、Ⅰ序論、Ⅱ本論、第1節孔子の孝、第2節孔子の志、第3節孔子の勇、第4節孔子の敬、第5節孔子の師、Ⅲ結論、から成立している論文(注付)である。孔子の孝、志、勇、敬や師とは何かを問題にしてみた。それらの根拠として、儒学における『論語』や『孟子』などの出典を提示して、各々の内容を分析や総合し問題にしてみたのである。また、中国古代、周の春秋時代、孔子は、仁、義、礼、知、信や愛の哲学はもとよりのこと、学、道、徳、善、天や自、己、教、論、朋友の哲学だけでなく、本論では、如何に、なぜそれら孝、志、勇、敬、さらに、師などの倫理(Ethics)、道徳哲学(moral philosophy)を主張したのかを問題にし、吟味してみたのである。つまり、孔子の倫理哲学は、人間としての基本的な理念(Idee)ではなかろうか、ということをもロゴス(logos)的に体系付けて、その意義と価値を多少なりとも考察した論説である。

Confucius' Philosophical Theory of Ethics(3)
—Attaching Importance to His Theory of Morality—

This paper aims at clarifying Confucius' thought, and comprises Contents, 1. Introduction, and 2. Confucius' theory. The theory comprises 2.1 Confucius' filial, 2.2 Confucius' bent, 2.3 Confucius' courage, 2.4 Confucius' reverent, and 2.5 Confucius' teacher. The final is 3. Conclusions. (Notes appear in the end of the paper).

It hereby remains to be seen what Confucius' filial, bent, courage, reverent, and teacher are. As the grounds for clarification of these items, details of the individual items are analyzed and later synthesized to take up them as problems by giving sources such as Confucian Analects, The Works of Mencius, etc. in Confucianism.

At the same time, it is discussed why in Ch'un-Ch'iu period of Chou, the olden time of China, Confucius advocated ethics and moral philosophy such as filial, bent, courage, reverent, and teacher with regard to not only benevolence, right, propriety, knowledge, sincerity, and love, but also philosophy of learn, the right way, virtue, good, heaven together with ourselves, one's self, teach, discourse, and friends. Furthermore scrutiny was also made with these matters.

That is to say, the paper intends to make observation in connection with the significance and value by systematizing them in a logostic manner with a view to explaining whether Confucius' ethical philosophy is the fundamental ideas (Idee) as a human being or not.